

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	目で読み（耳に聞いて）どれほど場面映像が得られているか：二年生の場合
Author(s)	市川, 孝夫
Citation	児童の言語生態研究, 2 : 17 - 21
Issue Date	1968-12-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045031
Right	
Relation	



目で読み(耳に聞いて)

どれほど場面映像が得られているか

二年生の場合

市川孝夫

はじめに

われわれが、一つの文章を読めば、そこから、何か、一つの意味を読み取る。そして、その読者が、おとなであれば、その文章から、ほぼ、同じような場面を捉えるであろう。

しかし、これは、われわれが生まれたときから有する能力ではなく、ある段階を経て、ここに到ったのであることは、言うまでもない。

それでは、どのような段階を経て、ここに到ったのかと問われても、何も答えられないのが現状である。以下、記すことはこの現状を打開して、子どもたちが場面想像および場面限定するその手がかりと、その発達を調査せんとするものである。二年生三十三名を対象にした。その報告である。

一 児童に課した問題は、次のとおりである。

前の文を 読んでから、問題を読みあなたも、そうだと思ふものには○、ちがうと 思うものには×を、わからないものには、△を つけなさい。

文① 「あ、みんな はさみね。わたし石だから、わたしの勝ちよ。」

〔問題〕

- 1、じゃんけんを しているところですか。
- 2、ゲームか、何かを しているとどうですか。
- 3、ここにいるのは、二人です。
- 4、ここにいるのは、三人ぐらいです。
- 5、ここにいるのは、二人か、三人です。
- 6、ここにいるのは、五人か六人です。
- 7、みんな、わたしより、としようえです。
- 8、みんな、わたしより、としました。
- 9、このことばを いったのは、男の子でしょうか、女の子でしょうか。

今後はこのご研究に刺激され、現場に密着したこの種の研究が盛んになると存じます。——以下略——

◆ 飛田多喜雄

「児童の言語生態研究」ご惠贈下さりありがとうございます。

発刊のことば、まず賛意を表します。現下の国語教育に対する批判、盲点、まさしくその通りです。ひとつ盛んに口にされました実態調査さえ、いつの間にか衰退という傾向です。そして知識を、技術をと、一方的な指導の風潮になりつつあります。

「遅ればせながら」と謙虚に言われている「言語生態の研究」こそ、実は、もっと早くから、そして本格的に研究さるべきポイントでした。このだいたいな課題への着眼と推進、とりわけ、子どもの側からの発言を世に問いたいとの姿勢、すばらしいと思います。創刊号の結論、子どもが生きた言語現象、その生態をふまえての提言、所見、ひとつひとつうなずくところあり、利益を与えてくれます。ご厚意ありがとうございました。いよいよなる充実と発展をいります。お礼まで

◆ 平井昌夫

「児童の言語生態研究」第一号をありがとうございます。風変わりな雑誌で大いに期待しています。長くつづいていくことを祈ります。

共同の総合調査などの結果も発表してください。

◆ 森岡健二

初夏、ますます御清栄、お喜び申し上げます。

このたびは御主宰の「児童の言語生態研究」をお届け頂き、ありがとうございます。みなさんの具体的かつ克明な御研究に大いに目を開かれ感謝しております。

今後の御発展を祈りつつ、右、厚くお礼申し上げます。

◆ 村石昭三

たいへん変わった、おもしろい雑誌をつくりました。創刊のお喜びと、長続きされることを期待いたします。言語生態などということばにもあなたの心が感じられます。いちどゆっくり話しあいたいものです。——以下略——

◆ 山根安太郎

先般は、貴研究室ご編集の「児童言語生態」の研究なる貴重なる研究紀要ご惠送ください、ありがたく厚くお礼申し上げます。実態研究の貴重なるご業績掲載されおり、この方面の研究は、今後ますます重要性をもつものと存じます。

ご高情を厚くおん礼申し上げます。

△敬称略・五十音順▽

文② 「けんちゃん、野球しないかあ。」

〔問題〕

- このことばを いった子は、今、友だちと野球をしている。
- このことばを いった子は、ひとりぼっちでいます。
- このことばを いった子は、大ぜいの中の一人です。
- けんちゃんは、今、野球をしています。
- けんちゃんは、とおくのほうにいます。
- けんちゃんは、近くに います。
- この子は、大きな声でいいました。
- この子は、小さな声で いいました。
- よんだ子が けんちゃんです。
- よばれた子が けんちゃんです。

文③ 「おとうさん、かきねは、いつなおしてくださるの。」

「かきねか。こんどの日曜日だ。」

「こんど、こんどって、あれから、もう、三週間たつたじゃないの。」

〔問題〕

- おとうさんと、おかあさんの話です。
- おとうさんと、おじいさんの話です。
- これは、二人の話です。
- これは、三人の話です。
- おとうさんは、毎日、家にいます。
- おとうさんは、日曜日だけ、家に

います。

7、「かきねか。こんどの日曜日だ。」といったのは、

⑦おとうさんです

④おじいさんです

8、三週間の間に、おとうさんは、

⑦かきねを なおしてくれました。

④少しなおしました。

9、あれからというのは、いつのことですか。

10、こんどの、日曜日に かきねをどうするのですか。

文④ 「あつ、きみ、ずるいぞ、よこからは いったりしちゃ。」

「だって、ここ、だれもいなかったじゃないか。」

「ちがうよ。みんな、さつきからこうやって待っているんだよ。」

「なあんだ、そうか。ごめん、ごめん。」

〔問題〕

1、よこから はいるといのは、

⑦ならんでいるれつに、わりこむこととです。

④よこのいりぐちから はいることとです。

2、よこから はいってきたのは、

⑦一人です。

④おおせいです。

3、まっているのは、

⑦じゅん番のくるのを です。

④番人が来るのを です。

か。」というのは、

⑦よこの入り口に だれも いなかったということとです。

④ならんでいるれつに、あいだがあいていたこととです。

5、「なあんだ、そうか。ごめん、ごめん。」といった子は、どこへ、行ったのでしょうか。

以上であるが、この文例(①~④)は、学校図書(昭和四十年発行) 小学校・国語三年下、「話しことば集め」に掲載されたものである。(ことわっておくが、この小論はこの単元の教材研究や意向とは全く無縁に本課題のためにだけ設問を作製して使用した。)

それでは、前に、あげた、会話文から、二年生の児童が、どのような場を、とらえていったか、考察して

いつてみよう。

「あ、みんな はさみね、わたし、石だから、わたしの勝ちよ。」

じゃんけんを しているところであるということは、全員が、とらえたが、このじゃんけんが、ゲームか何かの途中であると考えた者は八名、そうではないと考えた者が一七名、わからないと答えた者八名であった。たつた、これだけの会話文からでは、実際はどうなのか、わからないが、じゃんけんが勝ったにもか

かわらず、ずいぶん冷静であるように思われる点から見て、ゲーム等の途中の、重要な意味を持つじゃんけんでは、なさそうである。しかしそうした根拠を求めて、ゲームか何かの途中であるとかないとかのいずれかに定めたかどうかは疑わしい。

この場にいる人間の数を、児童は、どのようにとらえたかを調べてみる

と、

二人としたもの 二名

三人ぐらいとしたもの 二名

二人か、三人とした者 六名

五人か、六人とした者 二十二名

以上の人数と書いておいて、正しいと思うものに○を、つけさせたので、どれにも、○をつけない子、すなわち、これ以外の人数と考えた者が一名いた。

「みんな はさみね。」のみんなから五人か六人を選んだ者が多いのであるろうが、二人か三人の二人の場合

は相手だけになるから、みんなではおかしい。しかし三人となると自分を除くとあとのこりをみんなとして

も誤りではないから、三人に目を止めて、これをよしとしたかもしれない。問題はみんなに対応する数がどうで

き上がりつつあるかが知られるし、また注目すべきところであると

思った。

次に、じゃんけんが勝った子の年令を問題にしてみた。「わたし、石だから、わたしの勝ちよ」と説明的な口ぶりを意識しているかどうかを見たいためであった。

この子は、他の子より年上である

八名

この子は、他の子より年下である

三名

この文からは、何とも言えない

二十一名

であった。ただし、まとめる際に、

「みんな、わたしより、というえです。」にX(ちがうの意)をつけた者が

「みんな、わたしより」としてです。」に、△(わからない)を記した場合は、みんな、私より、年うえではないが、年したかもしれないと考えているとも考えられないこともないので、他の子より、年うえであるの八名の中に入れるというような、まとめ方をせざるを得なかった。このへんの様子を、くわしく記したいが紙面の都合上、省かさせていただく。

「わからない」と答えた者が二十一名の圧倒的多数は、予想されたことでもあるが、「年上である」が八名の数は予想以上であった。この答を出した児童の多くは、多分論理的に割

り出したのではなくて、先にも述べたようにこのことばの説明的な言語的な言いっぷりを感じとったのである。しかし、そう思いながら、そう思うことの不思議さ——つまりそのこと自体論理的根拠がないにもかかわらずそう思うことは、この場合の子どもたちと少しも変わらないことを考えさせられたのである。

次に、この子は、「男の子である。」と答えた者が、三名あったが、その他の三十名は、女の子であると答えたことを付記する。

「けんちゃん、野球しないかあ。」

「このことばを いった子は、今、友だちと野球をしている。」と答えた児童が十九名もいたことは予想外であった。もちろん、この文からは、実際は、どうであったかわからないが、今、野球をしたいんだが、相手がいなくてできない。そのとき、けんちゃんを遠くのほうに見つけての呼び声のように思い込んでいたことには痛烈な反省の機縁となった。

ところが、前に記した答えをしておきながら、「このことばを いった子は、ひとりぼっちでいます。」

ひとりぼっちでいると答えた者

五名

わからない 五名

ところが右以外に、○を記したものの三名、△を記した者六名においては、前回の質問に「いま野球をしている」と答えた十九名中の者である。友だちと、野球をしているのなら、ひとりぼっちでいることは、あり得ないのに？

これは、1の問の時は、友だちと野球をしていたと思いながら、「ひとりぼっちでいます。」と言われると、そんな気持ちになつてにちがいない。先に答えたことと論理的に合

つていなければならぬとすることと、この問が発せられたときに答えるようとした気持ちとが別であると考へてやることのほうがこうした子どもに則していることを教えてくれる。つまり、この気持ちを率直なものとして認める限り、子どもにとって、感情を論理的な筋道の上に流していくことは、習練されなければならない難事にほかならない。感情は本来奔放であり無責任——というよりはやはりこれが自然で、この自然感情の調整を言語の上に果たしていく仕事、本来の国語教育であると改めて思わせられる。

さらに、このことばを言った子は、多ぜいの中のひとりか、否かに対し

では、

多ぜいの中のひとり 十名

そうではない 十名

わからない 六名

2の答えと照合して、矛盾するもの 七名

〔例〕 2、この子は、ひとりぼっちでいる。 3、多ぜいの中のひとりです。 ↓

次に、けんちゃんの現在いる位置であるが、 遠くにいる 二十一名

近くにいます 二名

わからない 五名

矛盾する答、不明 五名

この距離と関連して、このときの声の大きさは、どうであったかという調査に対しては、二十四名の者が、大きい声で言ったと答えている。前の問題で、距離をとらえていると考へられた者は、全て、「大きい声」と答え、それに加わえて、わからないと答えていた五名の中から、三名までが、大きい声と答えている。これは、大きい声、小さい声かで何かを判断しようとする直観的なことはやさしくて、遠いか近いかの視覚による推定がむずかしいというように考へられるのも今後の問題としたい。最後に、「よんだ子がけんちゃん

す」よばれた子が、けんちゃんです」という文をのせたところ

前者は△、後者は○(すなわち、呼んだ子は、けんちゃんかどうかわからないが、呼ばれた子はけんちゃんです)二名

という答があった。呼んだ子が、けんちゃんという名の子どもでありうると思ったのか、呼んだ、呼ばれたの彼我関係で混乱をおこしたか、さもなければ彼我関係が明確に成立していないのか、この△組の不安はつきとめられねばならない。

「おとうさん、かきねは、いつなおし
てくださるの。」
「かきねか。こんどの日曜日だ。」
「こんど、こんどとて、あれから、も
う三週間たったじゃないの。」

この会話を、

①おとうさんと、おかあさんの会
話としたもの 十七名

②おとうさんとおじいさんとした
もの なし

①でも、②でもないとしたもの
十三名

・その他 三名 であった。

①でも②でもないとした子どもた
ちが、それでは、おとうさんとだれ
との会話と考えているのかを、知る
ことができなかったのは、たいへん
問題の作製がまずかったと思う。

おとうさんと、おかあさんの会話
とした者が十七名と一番多かった
が、筆者の予想より低かった。十三
名の父、母および父、祖父間の会話に
あらずとした根拠は何であろうか。

子どもたちは、「おとうさん」と呼び
かけているところから、自分たちと
同じ立場にある、一番「おとうさん」
と呼ぶことの多い子どもを思い起こ
していたのではないだろうか。文全
体から考えないで、「おとうさん」と
いうことばに大きく左右されている
のではないかと考えられる。

ほとんどの子どもが、ここでは、
二人の話であると、とらえている。

次に、おとうさんは、日曜日は、
割合に忙しくないことをとらえられ
たか、どうかを知るために、

⑤おとうさんは、毎日、家にいま
す。

⑥おとうさんは、日曜日だけ、家
にいます。

として、○、×、△をつけさせた
ところ、日曜だけ、家にいる十八名
のほかに、大きく、分かれた。たとえ
ば、毎日いないが、日曜日、いつも
いるとは、限らない(すなわち⑥が×
⑥が△)とか、日曜日いない、毎日、
家にいるわけでもない。(両方×)。日
曜日はいるが、毎日いるかもしれない

い(すなわち⑥△、⑥○)といった具合
である。家が、お店等で、おとうさ
んがいつも家にいる子にとつては、
両方、○をつけたくなるのにはがい
ないが、このことが問題であると思
える。場を捉えるときに自己の経験
的イメージを見てしまつて離れられ
ないことを物語っている。

8、三週間の間に、おとうさんは、
⑦かきねをなおしてくれた。⑧少し、
なおしてくれた。⑨ぜんぜん、なおして
いません。)に対して

①ぜんぜんなおさない二十六名

②なおしてくれました 四名

③少し、なおしました 一名

④ぜんぜんなおしていない。でも、
少し、なおしたかもしれない。(すな
わち、①↓△、②↓○) 二名

少しなおしたかもしれない④とい
うような答えをしている者は、場を、
考えてとらえていると言つてよい。

9、「あれからというのは、いつのこ
とですか。」という問に対して、

三週間前 二十八名

約束した日 二名

こわれたとき 一名

その他 二名

という結果であった。
10、こんどの日曜日、かきねをどう
するのですか、の問に対しては、

なおす 二十五名
なおしていただく 一名
おとうさんは、なおすつもり一名
わからない 一名
きる 一名

その他 四名

という結果であるが、「おとうさん
は、なおすつもり」という答えは、
前二回の日曜日、なおすつもりで、
なおしてくれなかったことを、明確
にとらえている。「わからない」とい
う子も、この意味で、わからないの
かどうか、もう一度、当たつてみる
必要がある。更に「きる」と答えた
子は、多分、生け垣を思い出し、「な
おして」ということばを、生け垣の
剪定という意味に、とらえたのでは
ないだろうか。この子の頭の中には、
かきねという、生け垣が出てくる
のではないだろうか。こうしてみると、
前にも記したが、生活環境に裏
打ちされたイメージ、場を形成する
のに役立てられ、というよりその区
別がなされないということがわかる
とともに、二年生においては、文全
体からの論理的判断ではなくて、一
つのことばからの連想によるイメー
ジ復帰が、文の場を理解しているこ
とにおきかわっているだけだと、ま
だまだ言えそうである。

「あっ、きみ、ずるいぞ。よこからはいったりしちゃ。」
 「だって、ここ、だれもいなかったじゃないか。」
 「ちがうよ。みんな、さっきから、こうやって、待っているんだよ。」
 「なあんだ。そうか。ごめん、ごめん」

1、横から はいるといふのは、

⑦ならんでいる列に、わりこむこととす 二十七名

①よこの入り口から、はいることとす。 六名

日常生活の中で、よく使っていることばであるにもかかわらず、六名は、①の答をしている。前の文を、読んでいうことを忘れて、ただ、横から はいるといふことはという問題の説明に○を、記してしまったのではないかといふ気もする。

2、横から はいってきたのは、

⑦ひとりです、 二十九名

①多ぜいです 四名

①の答をした四名は、君ということばが持つ意味を十分理解できていないか、忘れていふかの、どちらかである。

3、「待っているのは番人がくるのをです」と答えた者 二

4、「ここ、だれもいなかったじゃな

いかというの、よこの入り口に、だれも、いなかったということとす」と答えた者 四名で、3の二名は、4の四名の中にもはいっている。すなわち、二名は、完全に、番人のことを考えてしまっていて後の二名は、順番を待っていることを、わたっていないが、4では、まちがえてしまっている。

最後に、5、「ごめん、ごめんと云った子は、どこへ、行ったのでしょう。」に対して、

①列の一番後ろ 二十五名

②まっている 一名

③あいていたから、はいった（だからそこにいるの意） 一名

④ならんでいて、とつておいてもらった（だから、そこにいるの意） 一名

⑤ろうかにいる 一名

⑥うちへ行った 一名

⑦よこからはいってきた一名

⑧わからぬ 二名

②の答をした者は、どこで待つとも書いてないので、何とも言えないが、③④の答をしているものは、「ごめん、ごめん」といふことばの役割を、理解していない。また②の答え方も、十分ではない。⑤の答えをした子は何か、今までの経験の中に、

順番を待ったために廊下に出たことがあったのであろう。⑦の答えの背景を考えることは、むずかしい。少なくとも、②③④⑤の答えをしているは場を十分とらえていないと言えらるだろう。（少数のものではあるが）

まとめ

文例の①から④までを、それぞれ個々に考えてみてきたが、ここで、どの場（文）が、最も子どもに、とらえやすく、どこ場（文）がとらえにくかったかを、考えてみると、最初の①、②の文は、非常に、答えが、いろいろであったのに対して、③、④は、

数人の者が、かわった答えを出したが、ほとんどの者が、同じような答えを出した。結局のところ、①、②の文においては、短文であり、その内容とするところが、子どもの生活に近い。それだけに、読む子どものイメージが自由であり、逆に短文ゆえに文自体の限定が広い。ところが、

③、④の作用および効果は①・②に比べて逆となり、子どもの生活からはやや遠く、文も長い。だからイメージは限定を受け、しかも文は長いだけに、内容とする場は狭くなる。したがって、解答の成果から言うると右のようになるのだと思う。

すでに文中にも書いたが、二年生が場を把えることは把える行為はあっても、そこに方法が伴い、特別意識があるわけではない。感情と論理とのかね合いの調合がたまたまうまくいく場合といかぬ場合というほかない。うまくいった（正解と合った）といつても、決して感情と論理の調整を意識的に行なったわけではない。またその子が論理的であるとも限らない。そのテキストの印象から復帰して行くべきイメージの待ち合わせがあり、それがたまたまテキストの場と適合していたと考えるほうが自然のように思われた。

しかしこのことは何も悲観して言っているのではなく、むしろ、子どもたちに、目で読み（耳に聞く）ことが、人間にとってどうしていることなかを指導すべきことを教えてくれたからである。

（玉川学園小学部教諭）